

長雨、日照不足に対する農作物の技術対策

令和2年7月20日
技術支援課普及指導室

【1か月予報】

関東甲信地方（7月18日から8月17日までの天候見通し）

（7月16日 気象庁地球環境・海洋部 発表）

＜特に注意を要する事項＞

期間の前半は降水量が多く、日照時間が少ない状態が続く見込みです。

＜予想される向こう1か月の天候＞

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

- ・ 平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
- ・ 向こう1か月の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、少ない確率50%です。
- ・ 週別の気温は、1週目は、平年並または低い確率ともに40%です。2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【技術対策】

1 普通作物

（1）水稲

ア いもち病については、特に以下の点に注意する。

- ・ 早期発見に努め、急性病斑が認められる場合は、早急に防除を行う。
- ・ 箱施用剤使用ほ場でも油断はせず、発生の状況確認を行う。
- ・ 追肥については、葉色の濃淡に応じて適量を施用するが、いもち病発生ほ場では、施肥により発病が助長されるため、追肥を控える。

イ いもち病以外の病害虫についても、今後の発生状況、発生予察情報を踏まえ、効果的防除に心がけ、特に出穂前に降雨が多い場合は、稲こじ病が多発するため、出穂前の適期に予防防除を行う。

ウ 水管理については、生育ステージにあわせた適切な対応とし、根の健全化を図る。

エ けい畔が破壊しないよう、もぐら穴に注意するとともに、用排水路の点検を行う。

（2）大豆

ア 排水溝等の設置や整備を行い、湿害の発生を防止する。

イ 中耕培土の実施により、生育の回復を図る。

2 工芸作物

（1）コンニャク

ア 降雨による雨水や土砂等の流出入は、湿害や根腐病の発生を助長するため、排水溝の設置や手直しを行うとともに、必要に応じて土のう等を設置する。

- イ 葉面が濡れたままの状態が続くと「葉枯病」や「腐敗病」が発生しやすくなるため、適用農薬による計画的な薬剤散布を行う。
- ウ 発病葉や発病株は早期には場から持ち出す。

(2) タラノキ

- ア 雨水や土砂等の流出入による湿害や立枯疫病の発生を防止するため、排水溝の設置や手直しを行う。

3 畜産・飼料作物

(1) 畜産

- ア 雨が畜舎内に降り込んだ場合、敷料等の交換を行って畜舎内を乾燥状態に保つ。
- イ 堆肥舎等は、雨水の施設内流入や施設外へ汚水が流出しないよう施設及び堆肥の管理を行う。

(2) 飼料作物

- ア 長雨が続く場合は、機械による収穫調製作業が遅れたり、湿害による生育不良を招きやすくなるので、排水溝の設置など速やかな対応を行う。
- イ 曇雨天日が続く場合は、気象情報に注意を払いつつ、適切な収穫調製に努める。
- ウ 飼料イネ・飼料用米は水稻の項を参照のこと。

4 野菜

- (1) 多湿条件で発生が多い病害（トマト葉かび病、灰色かび病、キュウリべと病、褐斑病、ナス褐色腐敗病、綿疫病、イチゴ炭そ病、ネギ黒斑病、さび病、軟腐病、白絹病、キャベツ軟腐病、黒腐病、菌核病、レタス軟腐病、斑点細菌病等）が発生しやすいので、適用薬剤の散布を行い、予防的な防除を進める。薬剤散布にあたっては、作物が軟弱に生育しているので、薬害の発生に注意し、散布は日中の高温時を避けて、朝夕の涼しい時間帯に行う。

また、窒素肥料の多量施用は、病害の発生を助長するので注意する。排水不良ほ場は、排水溝を設置し、湛水による病害発生を防止する。

- (2) 降雨が続く肥料が流亡したり、草勢が低下している作物は、葉面散布や追肥を行い、草勢の維持・回復に努める。

- (3) 施設栽培では、換気を図るとともに整枝や摘葉を進め、採光条件の改善を図って、軟弱な生育にならないような環境づくりに心掛ける。

また、曇雨天日が続いた後に急激に天候が回復し、強い日射を受ると葉焼けや石灰欠乏症などが発生しやすいので、かん水や一時的な遮光などによる適正な温湿度管理を行い、発生防止に努める。

- (4) キュウリ、トマト、ナスの整枝・摘葉などの管理作業は、曇雨天日に行うと病原菌が侵入する原因となるので晴天日に行う様にするが、過度の整枝は草勢の低下を招くので注意する。

また、乱形果・奇形果や病害果を早めに摘果し、着果負担の軽減と病害の蔓延防止を図る。

(5) 生育中の露地野菜は、天候が回復したらうね間を軽く中耕して、根部への酸素の供給を図るが、降雨が続くと浅根になっていることが多いので注意する。

(6) 育苗中の苗は軟弱徒長を防ぐため、天候や土の乾き具合に応じたかん水管理に努めるとともに、育苗鉢の間隔を広げて通風、採光を図る。

(7) 今後作付けするハクサイ、ダイコン、キャベツ等の野菜については、ほ場の土壌水分が適度な時に、耕うん等の作業を行い、は種や定植が適期にできるように作業計画を立てる。

5 果樹

(1) 果実の肥大促進および品質向上を図るために、樹齢や樹勢に応じた適正な着果量になるよう摘果を行う。特に着果過多にならないように留意し、本摘果終了後でも再度見直し摘果を行い、着果量を調整する。

(2) 樹体の受光体勢を良好にするために、リンゴ、モモでは枝つり、支柱立て、夏季せん定を実施する。ナシ、ブドウでは混んでいる部分の枝誘引、摘心、徒長枝のせん定を行い、受光体勢を改善する。

(3) ウメの環紋葉枯病、モモ、スモモの灰星病、リンゴの斑点落葉病、炭そ病、褐斑病、ナシの黒斑病、輪紋病、ブドウの灰色かび病、べと病等の各種病害の発生に注意し、薬剤散布は適期を逃さないように行う。また、腐敗果の除去の手入れは早めに行う。

(4) ナシに裂果が多い場合は、裂果の程度が軽微なものは、できるだけ摘果せずに残し樹勢を落ち着かせる。

(5) 着色期に入るモモ等では反射マルチを使用し着色促進に努める。また、収穫期のモモは、果肉先熟となりやすいので、果実の地色変化を確認し適期収穫に努める。

(6) 追肥を行う場合は、窒素過多により過繁茂とならないよう気象の経過と樹勢に十分注意して施用する。

(7) 草生栽培園では早めに草刈りを行い、園内の通気をよくする。

(8) 排水不良となるほ場では、排水溝を掘るなどの対策を行う。

6 花き

(1) 長雨が続く場合は、排水路の整備等による排水対策を徹底する。日照不足条件下では、灰色かび病、べと病、キク白さび病、疫病、炭そ病等の発生が懸念されるため、風

通しのよい栽培環境を整え、適用農薬による適期散布に努める。感染源となる、罹病葉、罹病株は早期に処分する。

(2) バラでは、弱光条件下で、茎葉の軟弱化、花卉の退色、花の小輪化等、品質の低下をきたすため、常に整枝、誘引を行い仕立て本数を制限するなど、茎葉への受光体勢の向上を図る。

(3) は種・育苗中の鉢物・花壇苗については、鉢間隔を十分とり受光条件をよくするなどして、軟弱徒長を防止する。また、鉢物類の底面給水栽培では、曇雨天下で根からの養水分吸収力が低下し、鉢用土の過湿により品質低下が予想される。そのため、鉢用土内への酸素補給を目的に間断給水を行うなど、根の活性を高め生育促進に努める。

(4) 施設栽培では、被覆資材の汚れを取り除き光線の透過率を高める。日中は施設内の空気循環や換気を極力図り、高温多湿条件による軟弱徒長を防止する。また、天候回復による急激な直射日光は、葉焼けや萎れを発生させるので、遮光で調節するなど、今後の天候の経過に注意し栽培管理する。

7 養蚕

(1) 飼育中の蚕室・上簇室は、通風換気に注意して適正環境に調整する。特に、冷湿環境での飼育は硬化病の発生が多くなり、多湿環境での上簇は解じょ率の低下が懸念されるため、送風暖房機等を使用し環境改善に努める。

(2) ぬれ桑は、葉質低下が早いので長期保存を避けるとともに、冷所での保存を心がける。また、1回あたりの給桑量を少なくし給桑回数を増やすことで蚕座環境の悪化を防ぐ。